特定非営利法人
ザンビアの辺地医療を支援する会・
愛誠会昭南病院
山元香代子

ザンビアの辺地での巡回診療活動

ザンビア共和国は、アフリカ南部に位置する内陸国で、世界三大瀑布のひとつビクトリアの滝が有名です。ザンビアの面積は日本の2倍、人口約1500万人、約70の部族・言語を有する国です。乾季と雨季に分かれ、4月から10月は乾季でほとんど1滴の雨も降らず、11月末から3月は雨季で、この雨を待って人々は主食となるトウモロコシの種まきを始めます。

ザンビアでは保健省、州保健局、郡保健局の管轄の元、それぞれ大学病院、州病院、郡病院、ヘルスセンター、ヘルスポストが機能していますが、医療施設では人材不足が慢性化しています。政府を中心としたさまざまな国際機関、NGOなどの努力により、医療状況は改善してきましたが、都市と地方の格差が大きく、地方では十分な医療の恩恵を受けられない人々が数多くいます。

道路などの整備が遅れているために、辺地に住む人々は、数時間から1日かけて、徒歩であるいは牛車などでヘルスポストやヘルスセンターを受診しています。そのため、辺地の人々、特に5歳未満の乳幼児や妊産婦が基本的な医療サービスを定期的に受けられるシステムを確立することは急務であると考え、活動を開始しました。

2011年10月から、ザンビアの首都ルサカから車で約5時間、途中の2時間は4輪駆動車でないと走れない岩のごつごつした山道を走って、月2回のルアノ地区での巡回診療を開始しました。ルアノは、人口約2000人、農業・畜産で生活していて、電気・ガス・水道はなく、人々は浅井戸や川の水を飲み水に使っています。

ザンビアでの巡回診療を行う筆者

診察は私とクリニカルオフィサーで行い、助産師は妊婦健診・家族計画を、もう1人のスタッフが薬剤配布を行っています。マラリアの患者が多く、マラリア検査陽性率が高率です。また、ルアノ地区はトイレもなく、人々は小川の水などを飲料に使用しているため、乾季になると下痢や赤痢疑い、皮膚疾患、結膜炎の患者が増加します。2週間に1回しか診療に行けないので、研修を受けたコミュニティヘルスワーカーにマラリア検査キット、抗マラリア薬などを渡し、検査と薬剤投与と次の診療までのフォローをお願いしています。

現在は、ルアノ以外にもサンダラ地区やニャンカンガ地区で月1回の診療を実施しています。2011年10月の活動開始から2017年末までの約6年間に、計2万7000人以上の患者を診療してきました。

診療以外に、マラリア蚊の殺虫剤噴霧を行い、安全な水を確保するために、これまで19基の井戸を掘削しました。

私が日本に戻り不在の期間（約6ヵ月）も現地スタッフが活動を続けています。特にコミュニティヘルスワーカーは、農作業や牧畜などで生計を立てながらボランティアとして活動しており、彼らのがんばりがあったおかげで、マラリアによる子供の死亡が激減しました。

今でもさまざまな問題がありますが、多くの方々の支援に支えられ、現地スタッフの協力のもと、地域住民と十分な話し合いを重ねながら、これからも活動を続けていこうと考えています。

山元香代子
（やまもと・かよこ）

1956年宮崎県生まれ。1980年自治医科大学卒業。1995～2000年WHO西太平洋地域事務局医務官、2000～2001年USAID DISH IIプロジェクトウガンダ 小児保健アドバイザー、2003～2007年JICA専門家（フィリピン、ザンビア）、2010年ザンビア共和国医師免許取得。2011年10月ルアノ地区で巡回診療開始（現在まで）、2012年1月から鹿児島県愛誠会昭南病院非常勤（現在まで）。以後1年のうち3ヵ月毎に、半年をザンビアで半年を日本の病院で勤務する。